
Filia 友との約束 改訂版

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F i l l i a 友との約束 改訂版

【Nコード】

N 3 3 2 0 X

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

魔法使いが極少数しか存在しない世界アルセウス。その中でも炎・水・風・土の4属性の内一つしか属性が使えない者たちが4人存在する。その者たちをエレメントと呼ぶ。そのエレメントの1人である主人公が世界の運命へと大きく関わっていくこととなる。人々が進むのは、世界の再生か破滅か・・・

プロローグ

アルセウス大陸に存在する国家、

エリピオ

パシニイディ

ウィルド

ワイル

の4カ国が存在していた。しかし、炎・水・風・土の4属性の1つしか使えないエレメントと呼ばれる魔法使い^{マジシア}4人たちの内2人の死亡によりウィルドとワイルの2カ国が既に地図から消え既に滅んでいる。

そして、今も存在する1つパシニイディのプロシウス村。かつて、美しい川・森の自然に囲まれ貧しいながらも人々からは笑顔が消えなかった村が今は2人以外の人影は消え、炎が周りを照らしている。

村を炎に囲まれながらも、中央で2人の人影は向かい合い1人は右手に持っている剣をもう一人の方へと剣先を向けている。それをもう一人は右手に持った剣の剣先を地面に向けたまま視線だけを、剣を向けてくる人へと向けている。

「ネロ！平和への道を何故邪魔をする！俺たち2人が死ねば世界は平和になるんだ？！」

「ああ、本当に平和になるなら俺の命ぐらいやるさ！バルク。だがな、たかが伝承だぞ！？それに今の世界を見てみる、カtasとセオス陛下が亡くなり、ウィルドとワイルがどうなったか知っているだろ？！」

「ああ、判っている。だがな平和への道だ、これぐらいの犠牲は仕方がない！」

「これぐらい？これ程の犠牲をだして何が平和だ！もう終わりなんだ、この世界は！」

「終わり？・・・いいや、まだだ。俺たち2人が死ねば世界は生まれ変わる。平和になるんだ！」

バルクは、そこまで言い終わるとネロに向かって走り出し、剣を左側へと振り下ろす。

それを、ネロは右半身を傾け避ける。がしかし、すぐさまネロの首を狙った剣先が振り上げられる。

その攻撃は、後ろへ飛び避ける。

「やめろ、バルク！もし俺たちが死んで世界が生まれ変わっても、平和にはならない！人は争う愚かな生物だ！」

「だから、どうした！？」

バルクは、左手を振り上げる。すると、何も無い空中からいきなり炎が出現しネロの方に向かってくる。

その炎に対しネロは、水平に薙ぐ。すると、こちらも同じく何も無い空中から水の壁が現れ、向かってくる炎を防ぐ。そのため、水蒸気が発生し視界が悪くなる。ネロは何処からでも来られても良いように周囲を警戒する。

周囲を警戒していると、左に気配を感じ体を左へ向け剣を正面に構える。すると、飛び上がり剣を振り下ろしてくるバルクの姿を確認し、振り下ろされた剣を剣で防ぐ。

「ネロ、そろそろ最後でしょう」

バルクはネロと鏑迫り合いをしながら、空いている左手の掌にボール状の炎が出現する。そして、その炎をネロに向かって突き出す。そして、ネロはその炎に対し狙われている右横腹周辺に水の膜を作り炎の攻撃は防ぐ。が突きの反動は殺せず吹き飛ばされる。

ネロは、吹き飛ばれる瞬間に矢じりの形をした水を精製しバルクの右肩を狙って放つ。

「ぐっ」

ネロは、吹き飛ばされ地面を転がるがすぐに立ち上がりバルクを視界に捉える。だが、思っていたよりもバルクが近く体が固まる。その隙の所為で、右肩をやられながらも剣を手放さず左手で剣の柄に

添え、支えながら中央へ構えネ口の心臓へ突き刺す。

「ぐあ！」

ネ口は、バルクによって心臓を突き刺されながらも右に転がって、いた剣を右手で掴みバルクの心臓へと最後の力を振り絞り突き刺す。

「ぐう……そう……だネ口……これで良い……これで世界は……」

「無駄……だ……バルク………人は過ちを……くり……
・かえす」

そして、2人は互いに寄りかかり地面へと倒れる。

ネ口とバルクが、息を引き取ってから10分。2人が倒れた為残っていた、エリピオとパシニイデイが崩壊し其処は光が届かぬ闇の世界と化していた。そこに、1人の長身で黒の髪をした男性が急にその世界に現れた。

「やはり、人は同じ過ちを繰り返すか……本当に人は争いの先に平和を見出す事が出来るのかバイアス？だが、バイアスこれで最後だ……これで」

そこまで言っていると、謎の男は最初から居なかったかの様に消え、新たな世界の時が動き始めた。

プロローグ（後書き）

お久しぶりです、如月充です。

ようやく、改訂版の更新を始めること出来ました。

今度こそ、ちゃんと完結まで持つていくように頑張っていきたいと思います。

改めて、私の作品「Filia 友との約束 改訂版」をよろしく
お願いします。

感想・誤字脱字などお待ちしております

第1話

アルセウス大陸南東に位置するパシニイディ。

その国内で、南南西に位置するプロシウス村の東の森の中、2人の青年が剣を右手に別々の場所で、動物や魔物^{モンスター}たちを狩っていた。

身長175センチほど、濁った緑色の麻で織られた服、ズボンも濁った白を着ていて髪の色が水色で、前髪が長く右目が隠され後ろは肩に届かない長さ。

17歳・18歳ぐらいの青年ネロ・エピシミアが周囲の気配を探っている。そして、右に気配を感じそちらへ足を向ける。

木々の隙間を抜けると熊の姿をした魔物^{モンスター}・ベアルドが後ろ姿を見せながら歩いている。

ネロは、ベアルドに気付かれない様に息を潜めながら一步一步音を立てないよう慎重にその後ろ姿へと近づいて行く。

そしてネロが、30メートル程まで近づくと、1本の木の前で歩みを止め周りを見渡し何かを確認すると目の前の木の幹に印を付け始めた。

その行動を確認し、ネロは一気にベアルドに向かって走り出す。

しかし、あと数メートルという所でベアルドがこちらに気付き振り向く。

「ちっ！」

その事に舌打ちをしながらも走り続け、ネロはベアルドに向かって飛びあがり首を狙って右手に持った剣を左へ振り抜く。だが、ネロのその攻撃はベアルドの左の鉤爪によって防がれネロは後ろに下がるしかなかった。

ネロとベアルドは互いに向き合うが、ネロはベアルドの後ろに回り

込む為、反時計回りで動く。だが、そんな事を許す甘い敵ではなく、ネロと同じく反時計回りで動く。

その動きを30秒程続けると、ネロは敵に隙を作るべく地面に落ちている枯れ葉を蹴り上げる。そして、視界いっぱいには枯れ葉が舞い上がると一気に先程までベアルドが居たと思われる場所へ飛び出す。飛び出し目の前に現れたベアルドの首を刺し貫こうとする。

それをベアルドは咄嗟に右腕をかざし防ごうとするが、貫く攻撃の為その右腕ごと首を貫く事に成功するが、ベアルドの最後のあがきで左腕が、ネロとベアルドの間に入り、左腕が振られる。

首を貫くことに成功したネロはすぐに動くことが出来ずに、振り抜かれた左腕によって吹き飛ばされ視界に映る木々の風景が変わっていく。

「おっと……」

ベアルドによって吹き飛ばれるネロの耳に別の場所にいるはずの男の声が聞こえ、ネロの背中から止められる。

「ネロ、結構ギリギリだなあ。もう少し綺麗に戦おうぜ」

ネロを受け止めた男が、ネロに声を掛ける。そして、ネロを受け止めた場所に降ろしその男はベアルドの首と左腕に刺さっているネロの剣を取りに、ベアルドの方へ歩き出す。
その男の後ろ姿にネロは声を掛けた。

「バルク……ぐっ！ 助かった」

「ああ、構わんさ。それより、怪我はどうだ？」

ネロにバルクと呼ばれた、身長180センチ程ネロと同じ色の服と

ズボンを着て、髪の色が赤で短髪の青年だ。
バルクは、ベアルドに刺さっていたネ口の剣を右手に持ちながらその問いかけ、地面に座り込むネ口に近づく。

「ああ、少し痛むが大丈夫だ……くっ！」

バルクに言いながら、立ち上がった。その際、痛みの為少し声を上げてしまう。そして、ネ口はバルクが回収した自分の剣を受け取り、左腰の鞘に入れる。その時、バルクはネ口の服を捲り上げ怪我の状態を1度確認し1人で納得し首を縦に振っている。

そのままバルクは何も言わずにネ口を伴い、先程狩ったベアルドに向かつて歩き出す。そして、2人はナイフを取り出ししゃがみ込んでベアルドの皮を剥ぎ、大きな革袋に入れる。

「よし、ネ口。思っているより酷い状態だし、あまり無理せず戻ろぞ」

「わかったよ……」

ネ口はバルクの言葉に渋々了承し、先程2人で剥いだベアルドの皮が入った袋を肩に背負い村のある西の方角へ歩き出した。

革袋を背負った時にも、痛みが走る。そんな情けない状態になっていながらも、まだ大丈夫。と考えていた自分に呆れ、バルクが帰る提案をしてくれた事に心の中で感謝の念を抱いていた。

第1話（後書き）

2011年10月16日、加筆修正

感想・誤字脱字・ご質問などお待ちしております

第2話

狩りを終え、背中の革袋の中にベアルドの皮などの狩りの成果を入れ、ネロとバルクは自分たちの村プロシウスを目指す。そして、先を進むバルクの背中を見ながらネロは、先程のベアルドの戦闘を振り返る。

（さっきの戦闘は無様だった・・・ベアルドぐらいのDランク魔物^{モンスター}はすぐに倒さなくちゃいけないのに、それを打撲とはいえ怪我を負ってしまうとは・・・）

そんな事を、考えながら歩いているとバルクが立ち止って自分に声を掛けていた事に気付かずぶつかってしまった。そんなネロの様子にバルクは、少し呆れた顔をし言葉を口にする。

「おいおい、大丈夫か。何か、考え事か？」

「すまん。ああ・・・さっきの戦闘の事でちよつとな」

「なるほど。もしかして、Dランク魔物^{モンスター}ぐらい簡単に倒さなくちゃいけないのに・・・とか考えていたのか？」

バルクの言葉に、少し驚きバルクの顔を見る。

（そんなに、俺の考えて判りやすいのか？）

「まあ確かにこの世界の魔物は、S・S・S・A・B・C・D・Eつて7ランクに分かれてて、Dは最弱のランクから1つ上だもんな・・・お前の気持ちも判らんでもないけどよ。ランクなんて、所詮目安みたいなもんだ・・・その魔物がDランクだからといってDランクの強さとは限らんだろ」

バルクは、ネロにそう言葉を掛け右肩を叩き止めていた足を動かし始めた。その言葉を聞き、ネロは少しだけ晴れた心でバルクを追い掛け始める。

（そつだ、ランクの事を気にする余裕があるなら、強くなる事だけ

を気にしていればいい！)

森の中を、10分程歩き漸く街道が2人の視界に映り始めた。そして、森の中を抜け街道に出ると2人は南へ歩き出す。2人が歩いている街道は、首都パシニイデイへ続く道でもある為結構な人数が歩いている。大きな荷物を背負っている者・談笑を交わしている者・馬車に乗っている者・騎士の鎧を着ている者など、様々な格好をした人たちが笑顔を携えながら歩いている。

そんな大半の人が、パシニイデイへ向かう道を逆へ進んで5分程してプロシウス村の入り口が見えてきた。

そして、漸く村の入り口を2人が潜ると2人に気付いた村人たちが元気な声で声を掛けてくる。

「おかえり〜！ネロ、バルク」

「おつかれさん！」

「怪我はないかい？」

「狩りの成果はどうだい？」

その村人たちの声に、1つ1つ返事をしながらネロとバルクは村の奥へと進んでいく。

村の建物は、木造で作られ村を二分するかの様に中央には川が流れている。2人は、川の近くに建っている他の家より大きな家へと向かっていき、その大きな家の扉に辿り着くとネロが扉にノックをする。

ノックをしてから少し経つと、扉が開けられ老人が笑顔を浮かべながら2人を見上げていた。

「おお！ネロにバルクかあ。さあさあ入りなさい」

その老人は、2人を確認すると手招きをし家の奥へと戻っていく。

「「おじゃまします、村長」」

ネロとバルクは、そう言ってから老人・村長の家へと上がり奥にあ

る椅子へと向かう。

2人は、向かい同士に座り先に椅子へと座っていた村長へと視線を移す。

「村長、これが今日の成果です」

ネロが、そう村長に言い背負っていた革袋を机の上に置くとバルクも同じように革袋を置いた。

置かれた革袋を、村長は手元に寄せ中身を確認すると、独りでに頷く。

「ふむふむ、いつもすまないなあ2人とも。ざっと見た感じ今回の成果で充分数を揃えることが出来そうじゃからのお、明後日街へ出て加工品などを売りに行こうと思うんじゃがなあ、護衛として来てくれないかのお」

そして、2人は護衛の事を引き受けると村長の家を後にする。

第2話（後書き）

いつも読んでくださり有難うございます。

老人の話し方の表現の仕方ムズいなと感じましたね。その辺の表現が出来ている方が羨ましいです。

読まれている方に質問なのですが、打撲って怪我に入りますよね？自分は入ると思っっているんですが、大半の人が入らんだろうと言われるようでしたら書き直そうと思いますので、宜しければ感想板やメッセージで答えてくれると助かります。

それでは、次回の更新まで

第3話

ネロとバルクの2人は、村長の家を出るとそれぞれの自宅へと戻り始める。中央を走る川を渡りネロは右へバルクは左へ家のある方向へと向かう。

「じゃあな、ネロ。また明日」

「ああ、じゃあなバルク。今日は本当に助かったよ」

2人は、挨拶を交わし手を振って歩き始めた。

右手に川、左手に村人たちを視界を掠めながら、自宅の扉を写し待っている人物の顔を浮かべ笑顔を浮かべる。そして、扉の前に着き扉を開ける。

「ただいまーミウ」

ネロは、扉を潜り声を掛けると奥から、バタバタと急ぐような音を出しながら左側にある2階へと続く階段からエプロンを左手に持ちながら女性が降りてくる。

「あつ、おかえり兄さん。今日早くない？何かあったの？」

ネロは、ミウのその言葉に苦笑を浮かべた。

「いや、なんもないよ……ただ早めに切り上げたただけだから」

ネロのその言葉に、少し疑いの目を向けながらもミウは頷く。それから、ミウは家の奥にあるキッチンへと向かい、ガシャガシャと音を出し始める。

「それじゃ、兄さん。ご飯今から作るから待ってて」

ミウの言葉に返事をし、ネロは自分の部屋へ剣を置く為と少し横になる為に2階へ続く階段の方向へと歩き出した。

剣を置き部屋で休んでいると、ミウが食事の用意ができたと声を掛けてきた。ネロは、その声が聞こえてくると横たえていた体を起こし、1階へと降りる。そして、食事の並べられた席に着きネロは、

ミウと今日起きた他愛もない会話を交えながら食事をする。
それからネ口とミウは、食事を終えると2人で食器と一緒に洗い始める。食器を洗い終えた2人は自分たちの部屋へと戻り、ベッドに横になった。

鳥の囀りなぐさの音で、ネ口はベッドの中で目を開ける。横たえていた体を起こし、出かける為に服を着替え、ベッド横に立てかけている木刀の方を手に取り1階へと降りる。1階へと降りると既にミウは起きており食事の準備も終える所であり、後は机に並べる所であった。
「おはよう、ミウ。手伝うよ」

「あつ兄さん。おはよう・・・いいよ、もう終わるから。椅子に掛けてて」

そうミウに言われ、キッチンに向かう足を止めリビングへと足を向ける。そして、ミウも準備を終えリビングの席へと着く。ネ口は、ミウが席へ着くと両手を合わせ食事に感謝の意を示す。

「いただきまーす」

ミウも両手を合わせ食事に感謝の意を示し、食事を始める。

「ねえ兄さん、今日何処かに行く予定ある？」

「ん？ああ、後で北西外れの広場でバルクと剣の練習をしに行くけど」

「私もついて行っていい？」

「別に良いけど・・・来ても暇だと思うぞ」

「暇かどうか私が決める事だし、いいじゃん」

ミウの言葉に、苦笑を浮かべながら食事を再開する。ミウはネ口の言葉に笑顔を浮かべ止めていた食事を再開する。2人は食事を終え食器を洗う。それから、ミウは出かける準備をネ口は椅子近くに置いていた剣を手に取り広場に向かう為、外へ出る。

「それじゃ、ミウ。俺先に行ってるからな」

「はい」

ネ口はミウの言葉を受けながら、外への扉を潜る。そのまま、ネ口

は東にある村の入り口を過ぎ北へ数分歩き、分岐点に着くと西へと向かう。それから更に数分歩いていると、目的地である広場へと着いた。

第4話

ネロは、バルクが来るまで1人で剣の練習を始める為、左腰に挿している木刀を抜き正面へ構える。

- 俺は、強くなる！ バルクと肩を並べて一緒に戦えるように強くなる。そう思い、気合いを入れる

一歩踏み込み右上から左下へ振り抜き、即座に切り上げる。隙を作るべく切り上げた体勢のまま、相手の左足を狙い回し蹴りを放つ。しかし、それは失敗し相手に背中を見せたまま前へ転がり距離を取り、相手と向き合う。というイメージで練習をしていると、ようやくバルクが現れ後ろから声が掛かる。溜めていた息を抜き後ろへ振り向き手を上げ、挨拶をしてくる。

「よー、ネロ。待たせたな」

「気にするな、俺が早めに来ただけだ」

ネロが、そう言うとバルクは左手で頭を掻き、左腰にある木刀の柄へと手を添え、木刀を抜く。

「それじゃ、早速始めるか」

バルクはそう言うと、木刀を構え始める。それを見て、ネロも5メートル程距離を取り、木刀を構え直し思考を切り替える。

バルクは、構えを維持したままこちらの隙を窺ってくるため、こちらでも中々動けずに隙を窺うことしかできずにいた。その状態に2分

ほど耐えていたが、ネロは我慢が出来ずに、バルクへと向かっていく。

ネロは上段から振り下ろすが、それをバルクは少し後ろへ下がり余裕で避ける。

（ちい！　だけど、まだだ！）

避けられたのを確認するとネロは、更に前へと出て木刀を左から右へと薙ぐがそれもバルクは、剣を使うことによって防ぐ。攻撃を防がれ、ネロの空いている右横腹に蹴りが放たれ避ける事も出来ずに攻撃を食らってしまう。

数メートル吹き飛ばされたネロは顔を顰めながら、すぐに膝を地面に付きながらも起き上がりバルクがいるはずの方向へと顔を向ける。すると、追撃のためこちらに向かっていたバルクが、柄を両手で持ち木刀を振り下ろすところであった。それを、ネロは離さずに持っていた木刀を頭に翳す事によって防ごうとするが、両手で振り下ろされた勢いを殺すことが出来ずに、前へと体勢を崩してしまう。そこを逃さずにネロの首に木刀を突き付ける。

自分の首へと突き付けられている木刀を映して、ネロは四つん這いとなっていた体勢から、立ち上がり歯を噛締めバルクを見る。

「はあはあ・・・弱いな俺・・・」

「はあ・・・別にお前は弱くないって」

二人とも、上がっている息を落ち着かせるために立ちながら休む。

ネロは、視線を自分が握っている木刀へと移す。

木刀を見つめながら、考える。何故、勝てないのか。何故、負けるのか。何が間違っているのだろうか。と考え続ける。

自分の思考に嵌まって、どれぐらい経ったのだろうか？ネロの耳に、

ミウの声が届いた。

「兄さーん！ バルクさーん！」

その声で、ネロは思考の渦から抜け出し声が聞こえた方へと顔を向ける。そこには、右手を振りながらこちらへと歩いてくるミウの姿が映っていた。

そして、ミウはある程度距離が縮まると2人へと駆け寄ってきてバルク、ネロの順で見る。

「おはようございます！ バルクさん。もうぼろぼろじゃない、兄さん」

バルクには笑顔で挨拶をして、ネロに対しては呆れた声で言う。

それから、合流したミウをギャラリーに加えネロとバルクは剣の練習を再開する。何度も練習を繰り返し、ネロは何度も負けた。ネロが負ける度に、ミウは何か一言言ってくる。その一言に、ネロはやる気を出したり、落ち込んだりと繰り返し、バルクはそのやり取りを笑いながら見続けている。途中で、ミウが作っていたお弁当を昼食として食べた後も、練習を続けていた。

時間が夕方頃になると、ミウは夕ご飯の支度をしないといけないからと言って村へと帰った後も、しばらく2人は練習を続けていた。

「そろそろ時間も時間だし、次で最後にするか」

バルクの言葉にネロは頷き返し、木刀を構える。同じく、バルクも木刀を構えるとネロはいきなりバルクに向かって走り出し、木刀を突き出す。それを、バルクは体を縦にして避ける。ネロも、避けられると判っていたのかすぐに左へと振るう。しかし、その攻撃はしやがむ事によって避けられてしまい体当たりを喰らいそうになった

が、右へと飛ぶ事によって避ける事に成功した。

そして、また2人とも向き合い今度は同時に前へと出る。前へ出た2人は上段から右斜めへと振り下ろす。2人の木刀がぶつかり鍔迫り合いが行われる。

鍔迫り合いが行われ、5秒ほどするとバルクの体が右前へと進み受け流されてしまう。その為、ネロは体勢を崩され背中がガラ空きになってしまう。そこを、バルクは木刀を振り下ろす。

体勢を崩され、バルクの振り下ろされた木刀を避ける事も出来ずにネロは攻撃を受けてしまう。

「ぐう！」

攻撃を受けて地面を転がった。ネロは攻撃を受けた場所に左手を添え、顔を顰めながら立ち上がりバルクへと向きなおる。

「くそっ！……一度も勝てなかった」

「次回がある。だから、今回の失敗を糧に次に活かせばいい」

バルクに、そう言われても素直にその言葉に頷く事が出来ずに、ネロは顔を俯け黙ってしまう。そんなネロの姿に、バルクは苦笑し俯くネロへと近づき肩を叩く。

「ほら、ネロ。ミウちゃんも待つてるだろうし帰るぞ」

ネロは、そう言われ立ち上がる。バルクの右後ろを歩き、村へと帰る。

第4話（後書き）

遅くなり申し訳ございません。

次は、もう少し早く更新できるように頑張ります。

2011年10月19日 改訂

本当に申し訳ございません。ちゃんと確認したつもりでしたがまさか戦闘の途中だというのに、投稿した上に今日まで気付かず申し訳ございません。

こんな作者ですが、これからもよろしく願います。

感想・誤字脱字・ご質問などお待ちしております

第5話

村の帰途へ着きながら、ネロはバルクの後ろ姿を見ながら思う。

何故、勝てない？ 何が違う？ 俺が、弱いから？ アイツが天才だから？ 俺に、剣の才がないから？

ぐるぐるとマイナスな思考が渦を巻く。

オレガヨワイカラ…… テンサイジヤナイカラ……

「……口！ お……ネ……！」

考えの中に入っていたネロの耳の中にバルクの声が入ってきた。ハッとし、気付き周りを見渡しバルクを見る。すると、何故か心配そうな顔のバルクが写っていた。

「大丈夫か、ネロ？」

「あ……ああ、大丈夫。どうかしたか？」

「どうかしたかって…… 何度も呼んだのに返事しないし、振り向いたら俺を睨んでるし……」

その言葉の最後に「本当に大丈夫か？」と言われ、ネロも「ああ、大丈夫だよ。只ちょっと考え事をしてただけだから」と答える。

そのネロの言葉に、一応納得したのかバルクは頷くと歩みを再開した。ネロは、その後ろ姿に声を掛ける。

「それで、何か話があったのか？」

「ああ、そうだったな」

ネロの言葉にバルクは苦笑した顔をこちらに向け言い、また顔を前

へと向け話し出す。

「なあ……おまえって将来どうするか決めてるか？」

バルクに、そう言われネ口は怪訝な顔をしながら口を開く。

「いや……まだ決めてないけど……おまえは？」

「俺は、１年後軍隊に入るよ。入って、この国の皆を守る」

「……………」

「俺１人だけじゃ、限度があるかも知れない。それでも、守れる人たちもいる」

「……すごいな。そこまで考えてるのか」

「ネ口、おまえも一緒に来ないか？」

「……バルク。俺は只……村の皆と同じ様に、農作業や特産物に携わりながら……と考えていたんだ」

「……そうか。本当はお前と一緒に、この村この国を守りたかったけど……おまえがそう考えているなら仕方ないな」

そう俺の今の考えを言うと、バルクは一度歩みを止め顔は前を向いたまま首を縦に振ると、また歩き出し言葉を口にする。

俺もまた、バルクにつられて止めていた足を動かす。それから、１５分程歩くと漸く村の入り口が見え入り口を潜るとネ口は、バルクと別れ家へと帰宅した。

「ミウー、帰ったぞ！」

家の扉を潜り声を掛ける。キッチンからミウがピンクのエプロンを着け顔を出す。

「ただいまー、兄さん。お風呂沸いてるから、入ってねー！」

ミウは、そう言いキッチンへ顔を引つ込め料理の準備を再開し始める。その音を聞きながら風呂場がある方向へと向かう。

30分程、風呂に入る。風呂から上がると既に準備を終え料理を並べて待っていたミウに一言謝り、ミウの向かいの席へと座る。

ネロは、ミウと今日の事などを会話のネタにしながら40分程で食事を終え、食器を片づけ部屋へと戻り明日の為、もう寝る事にしベツドに横になる。

しかし、ふと今日の事を考える。

「（まさか、バルクが軍に入るつもりだったとは……俺は本当に、このままの生活で良いのか？ 俺も……いや、考えるのは今度にしてもう寝よう）」

首を横に振り、考えを中断すると今度こそ本当に眠る為目を閉じる。暫らくするとネロから、寝息が聞こえてきた。

「……口……きて………い！」

眠っていると、突然誰かに呼ばれた気がしてネロは目を開ける。しかし、まだ寝ぼけている為か視界は暗く天井を良く見る事が出来なかった。そのため、ネロは目を擦りもう一度見るがやはり暗く上手く見る事が出来なかった。

そのため仕方なく、起き上がるため手をベツドにつく。しかし、返ってきた感触はベツドの柔らかい感触ではなく床に手をついた様な硬い感触だった。その事に、疑問を覚えながらもネロは立ち上がると視線の先に映る者に驚いてしまう。

視線の先には、スラッとした細身、ネロと同じ髪色で腰まである髪の毛の女性がこの国では見たこともない服、詰め襟で上半身と下半身の境目がなく、下半身の左右は切れ目が入りその隙間から女性の美し

い足が見えている。

その美しい足に、視線を吸い寄せられていたネロの耳に、忍び笑いが聞こえ顔を赤くしながら誤魔化すように女性に問う。

「えつと……あなたは？ それに、ここはどこ？」

「ふふつ。初めまして、ネロ。私は、ウンディーネ。ここは、あなたの心の中」

ウンディーネと紹介した女性が言った言葉が、よく理解出来ずその言葉を繰り返してしまう。

「そう、ここはあなたの心の中。まだ形が定まっていない世界。だからこそ、色々な形に定まる可能性を秘めた世界。あなたは、これから様々な経験をする事でしょう。そして、あなたはその経験を元に目指すべき世界を作っていくなさい」

ネロは訳が判らずウンディーネの言葉を、最後まで聞いているとウンディーネは突然姿を消しネロの意識は途絶えた。

第5話（後書き）

やっと……5話を更新出来ました……。

自分が、情けないです。頑張るとか言いながら1週間近く経とうとしておりました。

こんな作者ですが、どんなに時間が掛かろうとも執筆は続けますので、どうか宜しく願います。

感想・誤字脱字・質問などお待ちしております。

第6話

鳥の囀りが聞こえネロは、目を覚ます。意識が朦朧としながらも、掠れた天井を見ながら夢の事を思いだす。

「（あれは夢だったのか……？ にしては夢だった気がしない。それに何だ？ この感覚は……。昨日までと空気が違う？）」

そう思いながら、横になっっている体を起こしベッドの縁に腰ふちかける。昨日までとの空気の違いに戸惑いながらも、街に出かける準備をしなければと思い立ち上がる。その時、服を収納している木製のタンスの方向へ顔を向けながら、視界に映る生物？

——薄い緑色の体と目はボールの様に丸く三角の形をした耳。そんな姿をした生物は自由にネロの部屋を動き続ける——
に顔を顰めてしまう。

「何故、幼精アエラスが見える？」

ネロは、自分が言った言葉に驚いてしまう。何故、知らない言葉を知っているのか？ 何故、昨日まで映っていなかったアエラスが、映っているのか？ その原因に1つ思い当たる節があり口に出す。

「あの夢か……」

だから何か問題があるのか？ と自問しすぐに答えを出す。

まあ確かに、少し視界に映るモノに戸惑っているがそれもすぐに慣れるだろうと考え、結果何も問題がないと考える。

そのまま、タンスの前へ行き服を着替える。着替え終わると、ベッ

ド横に立て掛けている剣を腰に挿し1階へ降りる。

1階へ降りると、いつも通り既に起きて朝食の準備を終えテーブルに並べている姿のミウがいた。そして、そのミウに笑顔を浮かべながら朝の挨拶をして席へ着く。ミウも、並べ終わるとネ口の向かいの席へ座る。

「兄さん、帰ってくるの3日後だっけ？」

「うん、3日後の8月18日だな」

「お土産期待してるからね！」

ミウにお土産を期待してると言われ、苦笑しながら頷く。その間も、アエラスが視界を横切ったり、ミウの服の中に潜り込んだり、アエラスの行動に視線が行かない様にするのに

——これだけは、一生慣れそうにないな——
と思いながら。

それから、食事を終え時間も迫っている事もあってネ口は食器の片付けをミウに願う。そのまま、席を立ち、村長の家へと向かう。

その途中で同じく村長の家へと向かっているバルクと橋で合流し、村長の家の扉へと着く。そして、ネ口は扉をノックをして、村長が出てくるのをバルクと2人で待つ。待っている間、バルクと今日の事を話し合う。バルクと話し合い1分ぐらいして扉が開いた。

「すまんのお、待たせたのお。それじゃあ行くかのお」

出てきた村長にそう言われ、村長を先頭にして2人は村長の後ろについて行く。入り口に着くと、入り口前に、街へ売る物を載せた馬車に3人は乗り首都 パシニイディ への道を走らせる。

第6話（後書き）

いつも、読んで頂いている皆様有難うございます。

楽しみにして頂いているでしょうか？ 残念ながら感想など無いので少し疑問に思いつながらも書いております。それでも、書き続けるつもりですが……。

それでも、時々他の方の作品の感想を見ながら羨ましいという気持ち胸の中に沸いてしまします。

その時は、勝手にその方の様に面白い作品を書いてやる！ と思うようにしていますが。

すみません、愚痴を聞かせてしまいました。これから、よろしく願います。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に、感想板にお書きください。

第7話

朝方に、ネロ、バルク、村長3人を乗せた馬車が、夕陽を背景に漸く街の入り口へと着く。馬車は、行き交う人々に気をつけながら街の中へ入り目的の場所へと目指す。

ネロは、初めて見る街——行き交う人々は自分たちよりも上質な服。建物は木造ではなく煉瓦で建てられ立派な街並み——にキヨロキヨロと周りを見渡す。

そんなネロの様子に、ため息をつき右手で頭を掻きバルクはネロを注意した。

「ネロ……頼むからそんなにキヨロキヨロするな。恥ずかしいだろ

……」

「いや……でもよお……」

「でもよお……じゃない！ 今日にはベアルドの皮とか売り終わったら街に泊まって明日の昼過ぎには、街を出る。だけど、昼までは自由なんだ。気になってる事とかは明日で良いだろ」

ネロとバルクが会話をしている間も馬車は、道を進み噴水のある中央広場へと着き、西側にある商業区へと進む——北へ行けば、王宮。東へ行けば、居住区。南、街の入り口——

商業区を進んでいると、馬車はあるお店の前で止まり村長が馬車から降りる。ネロ達には降りる前に、

「すぐに戻ってくるから、待ってなさい」

と声を掛けられネロ達は、村長が戻ってくるのを馬車で待つ事になった。

村長が、店に入ってから2分程経つと店の者と思われる男を引き連れ村長が店から出てくる。そのまま、村長は馬車へ乗りこみ、男は誘導しながら少し遠回りをして先程の店の裏側へと着いた。

それから、店の男は中へと戻る。村長は、馬車を降りると持ってたベアルドの皮などを店の中へと運ぶ様にネロとバルクにお願いすると店の中へと入っていった。

ネロとバルクは2人で協力し数回、馬車と店の中を往復し荷物を運び終える。荷物を運び終えると、やることもなく2人は店の中を見る。

店の壁には、ガウン、ケープ、パンドラ、オー・ド・ショース、バ・ド・ショース等の衣類、それにネックレス等のアクセサリも置いてあるお店であった。

それを物珍しくネロは、見ながら隅々まで店を見回る。見回っていると、あるペンダントが目についた。

それは、銀が使われ装飾品の形は盾、盾の中央下部分に剣の形となっており表面には、ライオンが描かれている。

そのペンダントに魅入っていると、後ろから声を掛けられ振り向く。そこには、話を終えたのか店の男の人が笑顔で立っていた。

「そのペンダントが気に入ったのかい？」

「えっ……？ ええ、まあ」

ネロは、その質問に怪訝な表情になり少し戸惑いながらも、気に入っていたのは本当の事だったので正直に答える。すると、店の男は更に笑顔を深め頷き続ける。頷き続けて15秒程、漸く頷くのを止めてネロに先程のペンダントをネロの右手に手渡す。

「えっ？」

手渡されたペンダントを、茫然と見つめ戸惑いの嵐が頭を通り過ぎると怪訝な表情で店の男を見続ける。

「何故？ って顔をしているね。そのペンダントは君にあげるよ。」

それに、これも」

未だに、店の男が言っている意味をうまく解釈出来ずにいるネロに男は1度背を向ける。そして、直ぐにネロに向き直りネロの左手を勝手に開き、その上にまた何かを載せる。

載せられた物をネロは見る。そこには、先程のペンダントと同じ銀が使われており、装飾品の形は剣とシンプルな物があつた。

「実はね、その盾の物とペアになっていてね。剣の物は紐を取り外す事が出来る様になっているんだよ。んで、外した剣は盾の裏側に鞘がついているから鞘に入れる事もできる。だから、その2つは君にあげるよ」

「いやっ！？ でもお金があ！？」

ネロは、漸く男が言っている意味を理解し慌てて2つのペンダントを返そうとする。

「お金の事は気にしなくていい。だから、これは返さなくて大丈夫だから」

「いやあ……あのぉ……でもぉ」

男の人に何度も返さなくて良いと言われるが、納得できる訳が無く困った表情をしながらペンダントを持っている両手と男に視線を何度も彷徨わせる。

そのネロの姿に、男は苦笑いし右手で頭を掻く。

「本当に返さなくて大丈夫だから。君たちの村にはいつも良いモノを入れてもらっているし、そのお礼みたいなものと考えてもらったらいから」

「……わかりました。有難う御座います」

ネロは、男の言葉に渋々納得しペンダント2つを受け取る。剣のペンダントはそのまま自分に掛け、盾はミウのプレゼントにしようと思っポケットの中へと入れる。

そのまま、馬車がある裏口へと向かうとする。しかし、男から声を掛けられ男へと振り向く。

「そういえば、君には名乗っていなかったね。私は、この店の店長をしているピスティ・ポリティスだ」

「ネロ・エピシミアです。本当に有難う御座いました」

お辞儀をしながら、もう1度お礼の言葉を口にし馬車へと向かう。店の外へと出ると、既に夜となっていてバルクと村長は馬車へと乗り込み、ネロを待っていた。

ネロは、2人に遅くなった事を謝り馬車へと乗り込む。そして、馬車を1度街の外へ止める為に、外へと向かう。

既に、夜の為歩いている人々がいない為、来た道を10分程で街の外へとつき馬車を止め3人は再び宿へ向かう為、商業区へ向かう。3人は宿へ着くと、部屋を取り直ぐにベッドへと横になった。

第7話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。感想板な
どに、お気軽にお書きください。

第8話

パシニイデイの宿で一夜をを過ごしたネ口達は、普段の6時より遅めの8時に起き宿を後にする。その宿の前で、3人は街の入り口に12時集合と約束し1度別れる。

バルクと村長の2人と宿の前で別れ、ネ口は街を1人で探索を始めた。中央広場へ向かうため、東へと歩く。歩きながら、やはり朝早いため周りの店は開いておらず、商業区に勤めている人々とすれ違う。すれ違う人々は、楽しそうな会話をしている人、下を向き地面を見ながら歩く者、急ぎ走っている者、色々な人を見る。そんな人を見ながら都会は、大変なんだろうか？ と思う。

村なら、確かに収穫の時期とかは大変だけど、毎日笑顔を浮かべ自分のやりたい事をやっているし、のんびりと日々を過ごしているのに、街と村何が違うんだ？ と思いながらも、既に中央広場へと着いているので考えるのを中断し噴水を見る。

そこには、やはり幼精ヴロヒ——水色の体と目はボールの様に丸く三角の形をした耳——が噴水の流れる水と戯れるように、目を細めながら飛びまわっている。

その様子に、笑顔を浮かべながら噴水へ近づき噴水の水を手で掬う。その行動の為かヴロヒ達近づきネ口の周りを飛び跳ねたり、クルクルと回ったりする。その行動に、さらにネ口は笑顔を深め1時間程その光景を楽しむ。

1時間程して、十分に堪能するとネ口は王宮を目にしようと思い、北へと向かう。9時になっている事もあり仕事場に向かう人々が少なくなり、商業区の店が開き始めたのか客呼びの声を背後に、左右には街路樹が均等に配置されている道を歩く。

王宮の入り口の前へと着く。しかし、目の前に聳える巨大な扉のおかげで城の全容を確認する事が出来ず、ただ少しだけ尖塔だと思わ

れる建物が左右に2つ見えるぐらいだった。そして、やはり自由に入れる訳がなく木製の大きな扉の右側には小さな扉があり、鎧を着込み槍持った兵士が2人立っている。その兵士たちは、城に入ろうとする者達を手元にある何かと交互に見て、大丈夫な者は城の中へと入っていく。それを見ながら、兵士は大変だな、とネロは思いながら一応目的を達したので王宮を後にする。

それから、ネロは時間ギリギリまで適当に街を見回る。そして、時間30分前になったので街の入り口へと向かう。南街道を進んでいると、前に何かのチラシを配っている女性がいた。

「もうすぐだよー！ 自信のある人は出てねー！ はい！」

そのチラシをネロも女性から受け取る。その時に女性は笑顔を振り向く。それに赤面しながらも誤魔化すようにチラシに視線を移し、内容を確認しながら女性から離れ入り口へ向かう。そして、チラシにはこう書かれていた。

武術大会開催！！

開催日 リコフォス9月20日

開催場所 パシニイデイ王宮 特

別会場

出場条件 自信のある者！！

ルール 1、魔法の使用も可

但し、殺傷性の高い魔法は使用不可

2、武器は総べて

刃引きされたモノのみ

以上をルールとする。破った者は、

即失格とする

優勝した者には、王宮直属近衛騎士団へ入団する資格を得る。そし

て、賞金100万キクロス。

ネロは、チラシを確認し終わるとチラシを折りたたみ入り口に置く。そして、馬車の所へと向かい既に着いていたバルクにチラシを見せる。

「バルク、これに参加してみないか？」

「ん？ 武術大会？ お、良いな！」

「だろ！？ それじゃ、明日から練習だな！」

「だな。参加するなら、優勝狙わないとな」

バルクと武術大会の事を、話していると時間になり村長が街から出て来て村へと帰る。

約1か月後、再びパシニイディへ訪れる事を考えながら。

第8話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第9話

ネ口達3人は、街を昼に出発し村には太陽が沈み、月がもうすぐ、真上につくという時間帯に漸く村へ着くこととなった。ネ口はバルクと一緒に馬車を降り、村長が馬車を止める様子を見る。馬車を止め終わったのか村長がこちらへ向かってきて、俺たちの目の前で足を止める。

「おつかれさん。今回は助かったわあ。次もよろしく頼むのお」

そう言つて、村長は村の中へと入っていく。その後ろ姿に、俺とバルクはお辞儀をして見送る。村長が、だいぶ離れ姿が小さくなった頃漸く、俺もバルクもお辞儀を辞めお互いに向かいあう。

「んじゃ、明日から大会に向けて頑張るか！」

「ああ、そうだな。バルク、よろしく頼む！」

大会に向けての想いを胸に抱き、俺は手をバルクへ伸ばす。その手をバルクは見ると、一瞬苦笑するかの様に笑うと、伸ばした俺の手を取り強く握ってくる。それに対抗するように、俺も強く握り返すとバルクもまた強く握り返してくる。その行為を繰り返しているとバルクが突然手を緩め、手を離す。それに、怪訝な顔をしてしまう。

「こんな事で勝負しても、面白くないだろ？」

「確かにな」

「勝負なら、大会で……だろ？」

「そうだな。なら、約束するよ。大会では、バルク……おまえに当たるまでは負けない。そして、優勝してやるよ！」

「俺も、同じセリフ言わせてもらつよ」

約束をして、握手を交わす。そして、途中まで街の事や大会の事など話しながら、歩き別れる場所まで来ると、それぞれの家の方向へと向かっていった。

「ただいまー！」

「おかえりー！ 兄さん！」

家の扉を開け、帰ってきた挨拶をすると待っていたのか直ぐに返事が返ってきて、2階からバタバタと急いでいる足音が聞こえる。その様子に、呆れながらミウが降りてくるのを待つ。

「兄さん！ おみやげ！ おみやげ！」

階段から降りてきたミウの一声に、ミウの頭を思いつき叩いてやりたい気持ちになりながらもポケットに手を入れる。そして、手を開きミウにペンダントを見せる。

兄の手の平にあるペンダントを見てミウは、顔を輝かせ喜び飛び跳ねる。

「わぁーペンダントだぁー。ありがとう！ 兄さん！ それにしても、良く買えたね？」

「いや、それ貰いもんだから」

俺の言葉に、ミウは一瞬で体の動きを止め顔を俯かせ溜め息を吐いた。

あれ？ 俺何か拙い事言っただけ？ と思うが、よく判らずミウが喋り出すのを待つ事にする。そう決めてから長いような長くはないような2分を、こちらを見てくるミウの気まずい視線に耐え、漸くミウが喋り始めた。

「兄さん！　いくら妹とはいえ女の子のプレゼントに、貰った物を渡すってどうなの？　しかも、それを正直に喋るし……」

「う……わ、わかったよ。次から、気をつけるよ……喋るの」

俺が、そう言うミウがまたガミガミと言い始めた。最初は、確かに俺の考えが悪かったかなと思って反省していたが、途中から全く関係ない事を語り出したので適当に返事をしていた。

そして、漸く言いたい事を言い終わったのか肩で息をしている。それでも、また口を開き何かを言おうとしているのを見て、まだかよ……とうんざりしていると、

「でも、本当にありがとね。これ一生大事にするから」

と言う言葉が聞こえ、ミウの顔を見ようとするが後ろを向き部屋へと上がっていかうとしていた。だけど、俺はミウの姿を見て笑顔が浮かべる。何故なら、ミウの足はスキップを踏んでいたのだから。

第9話（後書き）

ここ2・3日は、朝8時に予約掲載をして更新しているけど、何時ごろが沢山の人達に見て貰えるんだろう？

えっ？そんなの気にしてる時点で、駄目だって？

面白い作品なら、自然と人は見てくれる

そうですね、その通りな気がします。てな訳で、更新時間とか気にしない様にします。

ではでは、また明日！

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第10話

首都<パシニイディ>から、帰ってきて一夜が明ける。その日から、俺はバルクを相手に練習をしたり、東の森で狩りをしたりして大会前日までを過ごしていた。

そして、大会前日である今日。俺とバルクは、昼までを狩りをして過ごし今から街に向かうため、馬を引き村の入り口で、村の人達と挨拶を交わしていた。

「無茶しないようにねー！」

「2人とも頑張れよ！」

「出るなら、優勝！ それ以外はない！」

そんな激励？ を受けているとミウが人と人の隙間から体を割り込ませ前へ出てくる。

「兄さん、私も夕方頃だけど見に行くから。それまで負けないでね。バルクさんも頑張ってくださいね」

「あ、ああ。頑張るよ」

「ん？ ああ、わかってる。全力を尽くすだけさ、俺は約束を果たすためにもね」

そのミウの言葉に、俺とバルクはそう答えお互いの顔を見やり頷く。そろそろ、街へ向かうため馬へ跨る。そして、2人は村の人達に顔を向けた。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってくるよ」

その言葉を、最後に馬を街へと走らせる。その後は只、街に着くのを最優先にし馬を走らせている。馬を休ませるために取った休憩のとき以外は、2人とも喋らずに進んでいた。

それでも、漸く街へ着いたところには太陽は沈み街の喧騒が収まりそうな頃合いであった。街へ着くと、直ぐに宿屋へと向かい、今日の寢床を確保する。運良く以前泊まった宿屋の部屋が空いていたため、そこで一夜を過ごした。

大会当日、朝起きると参加手続きの為2人は宿を後にし王宮へと向かう。王宮に着くと、同じく参加手続きの為か扉前で大勢の人達が並び兵士たちが受付をしていた。

俺たちも手続きを済ませる為、今並んでいる人達の後ろへ並ぶ。そして、30分ぐらい経ち漸く俺たちの番が来る。

兵士の前へ立ち、言われた通りテーブルの上に置かれてる用紙に自分の名前と、使用する武器の種類を書き、その場を離れる。バルクも記入を終え、こちらへとやってくる。そして2人は、扉を潜り王宮の中へと入る。

王宮へ入ると、奥へ続く階段がありその奥には豪華そうな扉が見える。その階段の前には、左右に扉があり、左側に大会の舞台である闘技場があるみたいだ。そこを、兵士に案内されながら進む。進んだ先にも、扉があり兵士が扉を開けると、目の前には円形の舞台があった。

周りを見ると円形の舞台を中心に、溝のような感じで今歩いている道があり、その外回りに観客が座る席となっているようだった。

そして、兵士へ着いて行くように進み、ちょうど先程出てきた場所の反対側へ着くと扉があった。どうやら、兵士が言うにはこの先が選手の控室となっているみたいで、兵士に呼ばれるまでそこで待機していなければ、いけないようだ。俺とバルクはその兵士の言う通りにし控室へ入る。既にそこには、大勢の参加者が待っていた。

それから、控室で待ち1時間経つと外の様子が煩くなりはじめた。

そして、直ぐに拍手の音が聞こえ兵士が呼びに来た。

大会が始まり、結構な時間が経つがまだ俺もバルクも呼ばれていない。そして、控室にいる人数も減ってきていた。負けたら者は、直ぐに退散の為である。また、兵士が近づいてくる足音が聞こえ控室の扉が開く。

「ネロ・エピシミア！ ヒュー・ミスト！ 来い！！」

漸く、呼ばれ俺はバルクへ頷いてから立ちあがり兵士の後ろへとついて行く。控室を出て、外へ出る。

すると、ネロたちを呼びに来た兵士に剣を渡される。相手も同じく、その兵士から短剣を2本渡されているのが見えた。

そして、1度緊張をほぐす為深呼吸を繰り返す。しかし、うまく緊張をほぐす事が出来ず余計に意識してしまい溜め息を吐いてしまう。仕方なく、俺は舞台へ上がり対戦相手と向き合う。その時になってようやく、相手の姿が目に入る。茶色の髪を短く切り上げ、線の細い男であった。

そして、舞台全体に試合開始の合図が響く。

「第1回戦第8試合！ ネロ・エピシミア！！ ヒュー・ミスト！！ 始め！！！」

第10話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第11話

試合の開始の合図と同時に、ネロとヒューは相手に向かって走り出す。ネロは、剣の柄を両手で握り左手を体の前で交差させ、左肩の方が相手に近くなる形を取る。ヒューは、進むがままに両手を後ろへ流れるままの形を取っている。距離が近くなると、先にヒューから仕掛けてきた。

前へ飛び出し、その勢いのまま右手に持った短剣を横に振り抜いてくる。その攻撃を、下から掬い上げるように弾き返すが、こちらが振り上げた際ガラ空きになった横腹へヒューの持つ左の剣が襲いかかってくる。その攻撃をネロは、ジャンプをして左の剣の上を転がる様に回転して回避する。

「はあはあ」

ネロは、肩で息をしているがヒューはネロの動きを見逃さない様に睨み続けるだけ。その様子にネロは、長期戦はこちらが不利、と判断し直ぐに攻撃を始める。

上段から振り下ろし、左から薙ぐ。しかし、上段の攻撃は後ろに下がって避けられ、難いだ攻撃は両手に持つ剣をクロスさせ止められる。そして、クロスさせた剣でネロの剣は上に大きく弾かれ体が大きく反れる。

反れて隙だらけとなったネロへと、ヒューは左足を軸に回し蹴りを放つ。ネロは、避ける事も出来ずにそのまま吹き飛ばされ地面を転がり、剣を手から離してしまった。

「くっ！」

吹き飛ばされ、地面に右手をつきヒューを見る。武器の無いネロに

ゆっくりと近づいてくるヒュー。近づいてくるヒューを見て、考える。何か反撃の手段は無いのかと。しかしネロの剣は、10メートル先に落ちており拾うにはヒューの横を通り過ぎなければいけない。ヒューという相手が、拾うのを許してくれるほど優しくはないだろう。そう考え、他の手段を探す。

しかし、周りには石ころ1つ落ちていない。ただ、己の体のみ。

「（本当に何も無いのか？ 本当に、このまま負けを宣言するのか…… バルクと戦わずに？ …… いや！ 俺は、まだ戦う！ 約束を果たすためにも！ どんなに醜くても、勝つ！）」

そうよ、ネロ。あなたには、まだ戦う手段は残っている。思いださない…… その力を

ネロが決意を新たにすると、女性の声…… いや、ウンディーネの声が聞こえた。ウンディーネの声の言う通りにして、頭を巡らせ思いだす…… ^{マジア}魔法の存在を。

ネロは、ゆっくりと立ち上がり目を閉じて、右手の手の平を見せるようにヒューの方へと突き出す。そのネロの動きに一瞬剣を構えるが、何も起こらないのを見ると怪訝な顔をしながらもゆっくりと近づいてくる。

ネロは、ゆっくりとはいえ近づいてくるヒューを気にする様子もなく、目を閉じた状態のままイメージを固める。手の平から、間欠泉が噴き出すイメージを。そして、イメージのまま魔法を発動する。詠唱も魔方阵を描く事をしないまま。

しかし発動した魔法はイメージしていた威力より強く発動してしまう。発動した魔法に、驚いた顔を一瞬だけ見せてヒューは壁際まで吹き飛ばされ全身ずぶ濡れのまま気絶する。そして、ヒューと同じ方向にいた観客席の人達もまたずぶ濡れになってしまふ。

「しょ！？ 勝者、ネロ！ ネロ・エピシミア！」

ジャッジの人も、突然の魔法発動による茫然自失から立ち直ったのか詰まりながらも、ネロの勝利宣言を会場全体に響き渡らせる。その声と、同時に一部を除き盛大な拍手が発生した。

しかし、勝者本人——ネロも発動した魔法にほとんどの意識を持っていられ拍手に応じる事も出来ずに控室へと入っていった。

ネロが、控室へと入り姿を消した会場のとある場所にいた女性が後ろに控えていた老人に声を掛けていた。

「今の見たわね？ まさか、エレメントの覚醒者に会えるとはね……うふふ。彼に見張りを付けなさい。そして、どんな手段を使っても彼を私の前に連れてくるのよ」

女性が最後まで言い終わると、老人はその女性へと一礼してその場から姿を消す。そして、その場にはネロが消えて行った控室がある場所を見続ける女性だけが残っていた。

第11話（後書き）

やっと、覚醒しました……何故か長かった気がします。何故だ？
まあ、それはいいや。それにしても、戦闘シーンやはりムズい。

では、次の更新までお待ちください。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に
感想板などにお書きください。

第12話

控室へ入ったネロは、声を掛ける事をせずに黙ってバルクの隣りの席へと座り、地面を見つめる。

その様子に疑問に思っただのかバルクが声を掛けてくる。

「どうした、ネロ？ 負けたのか？」

ネロの姿に、負けたと思ったのか隣りに腰かけるネロへ顔を向け問い掛けてきた。声を掛けられ、ネロはバルクへ顔を向ける。バルクへ顔を向けたネロは、いやと首を横へ振る。

「……勝ったさ。ギリギリだったけどな」

「なら、何故嬉しそうじゃないんだ？」

「嬉しいさ……魔法の事も」

ネロは魔法を使えるようになった事も、もちろん喜んで……はず。急に魔法を使えるようになった驚きで、それは判らなかった。そのため最後の言葉が、小さくなってしまった。そのネロの言葉を理解できなかったのかバルクは、魔法という言葉をお小々な声で繰り返す。そして、言葉の意味を漸く意味を理解したのか、ガシ！ とネロの肩を掴む。

「本当なのか、それは!？」

「あ、ああ。本当だよ」

「そうか！ おめでとう！」

ネロの事を自分の事のようにバルクは大きな声を出して喜ぶ。その喜びように、周りにいる他の参加者が、何事だ？ という顔をして

こちらへ顔を向けてくる。それに、気付きネロは苦笑いでこちらを見る参加者に頭を下げ、バルクへ向き直る。

「バルク……喜んでくれるのは嬉しいが周りを気にしてくれ」

「あはは……す、すまん」

バルクも、周りがこちらを見ていたのに気付いたのか恥ずかしそうに謝る。そのまま、バルクは先ほどよりも声を小さくして言葉を続ける。

「でも、本当良かったじゃないか！ 軍に所属すれば、魔法を使えるっただけで偉い立場になれるってらしいし」

「軍に入れば、だろ？ 入らなければ意味ないし、今俺は入るつもりないから。」

そう話していると、兵士が入ってきた。

「バルク・スクード！ シーネ・フィー！ おまえ達の番だ、来い！」

遂に、バルクの番が来たようで、バルクが立ち上がり控室を出て行く。その後ろ姿が消えると、目を瞑り気持ちを落ち着かせる。

それから、15分経つとバルクが勝ったようで控室へと戻ってくる。その姿には、戦闘に苦労した様子も怪我を負った様子もなく、しっかりとした足取りでネロの隣りに腰かけてくる。

「やっぱり余裕だったみたいだな」

「いやいや、そんな事はないぜ？ 結構厳しかったから」

そのバルクの言葉に、もう1度バルクの姿を見る。特に、服が破れ

ていたり、息が乱れていたりという事もなく、ただ汗を流しているだけであった。その姿に、本当に驚しかったのか？　とか思いながらもバルクの強さに憧れを覚える。

それから、大会は2回戦へ突入したみたいで参加者の名前が再び呼ばれ始める。そして、2回戦が始まり選手の呼び出しが5回目の時に、ネロが呼ばれる。

「ネロ・エピシミア！　ジョーム・シルミア！　来い！！」

ネロは、立ち上がり深呼吸をしてから控室を後にし舞台へ上がる。そして、対戦相手のジョーム——金髪で前は長く左右に分け、後ろは短く切り上げた。鍛えられた体をしている——は、大剣を肩に乗せ互いに向き合い、対峙する。会場全体に、試合開始の合図が響く。

「第2回戦第5試合！　ネロ・エピシミア！！　ジョーム・シルミア！！　始め！！！！」

その合図と同時に、ジョームは肩に乗せていた大剣を両手で持ち構える。ネロは、合図と同時にジョームへ向かって走り出す。後、5メートルに近づくと飛び上がり、体重を乗せ振り下ろす。

その攻撃をジョームは、冷静に上に大剣を翳しネロの剣を受け止める。受け止めた剣を弾き、ネロを引き寄せようと、左手を伸ばしてくる。

その左手を、ネロは右足を使い横に払う。ネロは、地面に着地して足を払おうと足払いを掛ける。だが、足払いは、ジャンプされ避けられて横に転がり距離を離される。

土地よー！

ヤツを、

此处に縫い付けよー！！

「I yn! avθρωποζ σταμ?τησα!」
「くう！？」

どうやら、ジョームも魔法使いだったみたいで距離を開けられた時に、詠唱を終えていたのか魔法が発動する。

ネロが、立つ地面が蠢き1度左右に割れる。その後、ネロの足に絡み付くように纏わりつき固まる。

その纏わりついた地面から逃れるため、足をバタバタとさせる。しかし、纏わりつく地面から逃れる事は出来ずに、ジョームは近づいてくる。

ネロは、近づいてくるジョームに向かって先の戦闘で発動させた、間欠泉の様なイメージの魔法をジョームに向かって放つ。

「 $\phi \omega \tau$ ！？！ $\varepsilon \chi \theta \rho$ ？？ $\sigma \beta$ ？ $\nu \omega$ ！」

火よ！

敵を

燃やし尽くせ！

ジョームは近づきながら詠唱すると、ネロの魔法の周りへと纏わす。そして、ネロの魔法はジョームへ届く前に消え、その役目を終えたジョームの魔法も消失する。

その光景に、ネロは目を見張りながらも更に一瞬で魔法を連続で発動する。ジョームを閉じ込めるように水で囲い、間欠泉の魔法でジョームを吹き飛ばす。

ジョームは、詠唱して防ごうとするが詠唱が間に合わず水が口の中に入る。そのため最後の方を口にする事が出来ずに水に囲まれ息が出来ずに苦しんでいる所に、ネロの魔法によって場外へ吹き飛ばされてしまった。

「勝者！　ネロ・エピシミアー！」

ネロは、肩で息をしながら顔を顰めながら小さくガッツポーズを取る。しかし、地面に縫い付けられているためそこから動く事ができなかった。

その為、スタッフが地面を壊してくれて漸く控室に戻る事ができた。

第12話（後書き）

詠唱の言葉は、ギリシャ語ですが単語を並べているだけです。
なので、基本は雰囲気みたいなを感じていただければ大丈夫です
ので、文法とかは気にしないでください。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に
感想板にお書きください。

第13話

第2回戦の試合を、何とか勝利で終え控室へと戻る。その途中で、順番が来たのか会場へ向かうバルクとすれ違った。そのすれ違いざま、お互いに

「頑張れよ！」

「おめでとさん！」

タッチを交わし、それぞれの目的の場所へと向かうのだった。それから、控室へと戻り空いていた椅子へと腰掛ける。

ネロは、先の試合を終えてから始まり出した頭痛に顔を顰めながらも、バルクが勝利し控室に戻ってくるのを、ジッと待つ。

だが、バルクも先程とは違い苦戦しているのか直ぐに戻ってくる事はなく時間が経つにつれて、ネロは焦りを覚える。

——まさか、あいつが負けるのか？ あれだけ、強い奴でもか？

いやいや、相手が粘っているだけさ！ あいつが、負ける訳なんてないさ

そんな事を考えていると、バルクの試合が終わったのか兵士が次の試合の人達を呼び控室を後にする。その兵士の姿が消え、ネロは扉がある方をジーっと見つめる。

——バルク……勝ったのか？ 負けたのか？ 開けるのは、おまえで合ってくれ！

兵士が姿を消し、30秒程経ち扉が開く。扉が、開き姿を見せたのは……バルクであった。現れたのが、バルクでありホッとして息を吐くネロ。手を振り、場所を示すネロ。それに気付き、少し引き攣

った笑顔を浮かべ、手を上げるバルク。

そのバルクの引き攣った笑顔に気付きネロは、やはり相手が手強かったんだな。と勝手に解釈して納得する。バルクは、ネロの隣りに腰かけて左側の脇腹を擦る。

ネロはその行動に心配になり、声を掛けた。

「大丈夫か？」

「多少痛むが、試合に響くほどじゃない」

「……そうか。それにしても、珍しいな。おまえが、そんなになるなんて」

「おまえ……俺をなんだと思ってる？」

「え？ そりゃ……どんな事でも判断をミスる事の無い完璧人間」

「なっ！？ おまえなあ！ 俺だって、間違えることだってあるわ！」

俺が、完璧人間と評価するとバルクにしては珍しく声を荒げて抗議してきた。その様子に、笑ってしまい何とか笑いを収めて謝り、天井を見上げ喋る。

「そつだよな。……この世界に、完璧な人間なんて存在する訳ないよな。」

不完全だからこそ、俺たちは人間なんだから」

その後も、バルクと適当に会話をして次の試合まで時間を潰していると漸く名前を呼ばれる。

「ネロ・エピシミア！ バルク・スクード！ 来い！！」

どうやら、次の試合の対戦相手はバルクであり約束通り当たる事は

できたみたいだった。ネロは、立ち上がり同じく立ちあがったバルクへと向きなおり、握手を交わす。

「漸く、試合だな！ バルク！」

「ああ、そうだな。……ネロ！ 本気で掛かって来い！」

握手を交わした後、ネロは先に行き控室を後にする。そして、会場へ出て舞台の上で後ろから来ていたバルクと再び向かい合い、開始の合図を待つ。

「第3回戦！ 最終試合！！ 始め！！！」

「はあああああ！」

「うおおおお！」

開始の合図と同時に、声を上げながらバルクへと向かう。同じく、声を上げながらこちらへと向かってくるバルク。

ネロは、バルクと本気で戦えるこの場所に立つ事ができて喜びを覚える。練習では、俺が本気だとしてもバルクは本気で戦っていると思う事ができなかったから。いつも、手加減をして俺と力を合わせていると感じていた。だから、使い慣れていない魔法でも本気を出させるため、使ってやる！ あいつが、本気を出したら俺なんて足元に及ばないとしても、本気のあいつと戦ってみたいから！

「だから！ 今この時！ 魔法が使える事を感謝し！ 喜んでいる！」

第13話（後書き）

……何か、グダグダしてる気がする。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第14話

バルクとの試合が開始され、走ってバルクへ向かって走り出す。走り寄る間にも、バルクへ向かって丸いだけの魔法を5個、発生させ放つ。バルクは、自分に向かってくるものだけを剣を使って防いでくる。

その間に、バルクへ近づいたネロは肩を狙い、剣を振り下ろす。だけど、そう簡単に喰らう訳もなく剣で受け止められてしまう。

その防御を崩そうと思い、更に押し出そうと力を加える。押し出そうと力を加えるが、バルクはそれを狙っていたのか均衡していた力が崩れ、右側へ受け流されてしまう。体勢を崩されガラ空きとなってしまうた背中へ剣を振り下ろしてくる。

その攻撃をネロは、少し頭痛を感じながらも圧力を高めた水を背中側へ発生させ攻撃を防ぎ、前へ転がってバルクと距離を取る。

「おいおい……便利だなあ。だが……！」

直ぐにバルクへ向き直りバルクの顔を見た。呆れているようなセリフを言いながら、バルクの顔は笑顔を浮かべていた。そして、こちらへ突っ込んでくる。

突っ込んでくるバルクからの攻撃を、剣を使い防ぐ。だが、1回防いだとしても直ぐに次の攻撃が来る。その連続攻撃を、ネロは後ろに下がりながらも防ぎ続ける。防いでいる間も、攻撃へ転じようと魔法のイメージを固めようとする。頭痛とバルクの連続攻撃に、慣れない魔法のイメージに何度も頭の中で途切れさせながらも、後2・3歩という場内ギリギリの所でイメージを完成させ発動させた。

すると、バルクの右横に鞭の様にクネクネとする水が出現する。その水は、出現するとバルクが持つ剣を奪い取り、場外へ弾き飛ばす。

「なっ！？」

急に出現した鞭の様な水に剣を奪われ動きを止めたバルク。その隙を逃さずネロは、頭痛に耐えながら水鞭すいべんを発動させバルクを場外へと飛ばそうとする。

「ぐっ！？　ぐあああああ！！！」

しかし、バルクに水鞭が巻き付き飛ばそうという動きを見せたとき、突然両手で頭を抱え膝を地面につけ苦しみ出す。苦しみ出すと同時に、バルクに巻きついていていた水鞭は形を保てず霧散し周りに水を撒き散らす。

「ネロ！？　おい、どうした！」

バルクは、服が濡れているのも気にせずネロへ近づき顔を覗き込む。しかし、バルクに気付く事もなく苦しみの声を上げ続けている。その様子に、周りを見渡し叫ぶ。

「誰か！　来てくれ！！　ネロがあ！」

バルクは、周りに助けを求め続ける。叫び続ける頭の中でバルクは、ネロに一体何が起きているのか？　疑問に思いつつも、対応の遅い兵士に向かって叫び続ける。

そして、ネロが苦しみ始めてから5分。漸く兵士がやってきてネロを抱え込み、会場を後にしていく。

バルクも、その兵士たちについて行きネロの様子を窺う。ネロも、兵士が来る少し前に苦しみ叫んでいた様子を潜め、今はグッタリとしている。

控室とは逆の、王宮へ続く道を歩き王宮へと出る。兵士は、そのま

ま右にある扉を潜り医務室らしき場所へと入っていく。

中へ入ると人が居てその人は兵士に指示を出し、兵士は言う通りにし奥にある2つ内の右側の寝台へとネロを寝かせる。その人は、寝かせられたネロの脈を測ったり息の確認をしたりしている。そして、その人は1人頷きバルクへ振り向く。

「どうも、初めまして。私は、王室付きの医者^のヤトウロス・ドウトールだ」

そう挨拶をし手を差し出してくるヤトウロスに戸惑いながら、バルクも名乗り返しその手を握り返す。

「少し確認したいんだが……彼は、魔法を使えるだよね？」

「？ ええ、使えるようになったのは1試合目の時とネロは言っていましたか……」

「なら、魔法の使い過ぎで頭に負担が掛かり過ぎたんだろう。魔法^{マギ}使いは、1度頭の中にマナを取りこみ魔法を発動する。そのため使い過ぎると頭痛を感じたり、この子の様に気絶。最悪……死に至る」
「な！？ ネロは大丈夫なんですか！？」

ヤトウロスの最後の言葉を聞き、焦って彼の肩を掴む。そのバルクの様子に、まあまあと苦笑しながら肩に手を置き、落ち着けと言ってくる。彼は気絶、と再びヤトウロスに言われ恥ずかしげに顔を反らし、ネロの様子を見る。

ネロは、こちらの心配を馬鹿にする様に眠っているようだ。その様子にさっきまでの自分が馬鹿馬鹿しくなり、溜め息を吐いてヤトウロスにネロの事を任せ、会場に戻る。

「うつ……うつ」

気絶していたらしく、気付けば知らない所で眠っていた。状況を確認するために周りを見る。隣りには、ベッドがもう1つ有りカーテンは自分の方も開け放たれていた。人は居ないみたいで、正面の机には用紙が散らばっており、机の右隣りに薬の入った棚が置かれている。

どうやら、此処は医務室らしくバルクとの試合で気絶したネロを誰かが連れて来て寝かせてくれていたらしい。そして、自分の状態を確認し特に問題がなさそうと判断してベッドを立ち上げる。

立ち上がると同時に、扉が開かれる音がしてそちらを見る。白衣を着た30後半に見える医者にしては筋肉質な肉体をしている男性が、左手に飲み物を持ち入ってきた。

その男性が、こちらに気付き笑顔を向けてくる。

「どうやら、もう大丈夫そうだね。私は、王室付きの医者ヤトウロス・ドウトールだ」

「ネロ・エピシミアです。どうも、有難う御座いました。試合ってどうなったかわかります？」

「ん？ ああ、今は準決勝だったかな。君のお友達も頑張っているよ」

無事に勝ち進んでいる様で、安心する。自分の所為で心配させ、その為試合に集中出来ずに負けてしまうのではないかと。だが、その心配は必要なかったみたいで良かったと思う。

ネロは、バルクの試合を見る為観客席へ行こうとヤトウロスに1度お辞儀をして、医務室を出て行こうとする。

「ああ、ちょっと待ってくれ」

そう言葉を掛けられ、医務室を出て行こうとした体をヤトウロスに戻し首を傾げる。

「実はね……陛下が君にお会いしたいそうなんだ。すまないが、私について来てくれ」

第14話（後書き）

もう少し掛かりそうですが、先に報告しておきたいと思います。
第1章が終わったら、第1章の修正をしていきたいと思っておりますので、宜しく願います。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に
感想板にお書きください。

第15話

ヤトウロスに、女王陛下に呼ばれていると言われヤトウロスの後ろについて行く。しかし、何故自分が陛下に呼ばれているのか見当もつかないネロは、疑問に思いながらも陛下に会えば呼ばれた理由は判るだろうと考え、黙ってヤトウロスの後ろについて行く事にした。医務室を後にして、医務室へ続く扉の左斜めにある扉を潜る。扉を潜り15メートル程進み、正面と左にある扉の左側を潜り先へ進む。更に7メートル進み右にある階段を上る。その階段を上った先には、会場が見えておりその途中には豪華なイスが背もたれ部分をこちらに向け置いてあった。

そのイスが見えると、ヤトウロスはそのイスの隣りに跪きイスに腰かける人物へと声を掛けていた。

「女王陛下、御待たせしました。彼が漸く目覚めましたので、今お連れしました」

ヤトウロスが、女王陛下にそう申すと陛下と言われた人物の手が上げられヤトウロスは立ち上がり後ろへ下がる。その時、ヤトウロスの手に招き寄せられ先程ヤトウロスが、跪いていた位置へネロも跪く。

「女王陛下。お初に御目にかかります、私プロシウス村出身のネロ・エピシミアと申します。この度は、私のような者をお呼び頂き有難うございます。私に何用で御座いましょうか」

「ネロとやら、そなたの力。我に仕え、この国に繁栄をもたらす為、使う気はないか？」

ネロは、その言葉に困惑を覚える。女王陛下自ら、何も結果を残し

ていない平民を軍ではなく我に仕えよと言ってくる。確かに、名譽な事だとは理解している。だけど、自らの利益の為に他者を殺すかもしれない場所に仕えようとは思えない。ネロは、自分や自分の大切な人を守る為にしか武器を手取る想いはあった。その事を正直に言い、断る。

「ふむ……命が危険に晒された時にのみ武器を取る。……傲慢だな。自分達さえ守れたら良いと？ それさえも出来ない弱い者たちはどうする？ だからこそ、力ある者は弱い者を害ある者から守る為の存在でなければいかんのだよ。それでも、変わらないか？」

「……はい。私は、私の身近な人達だけを守ればそれだけで構いません」

その言葉を最後に、女王陛下は下がれとネロに命令しそれに従ってその場を後にする。

力ある者……ネロにとって力は妹のミウや村の人達を守れたら充分なんだ。この国やこの国の知らない人間達を守る為に力を求めて練習したり、魔法を使える事を喜んだ訳じゃない。

傲慢なんかでもない……自分の力で守れるのは村の人達で限界。そう思っているだけだ。守れるなら、守りたいさバルクが守りたいと思っている者を。

そんな事を考えていると、いつの間にか一般の観客席へ着いており空いている場所を探そうと周りを見渡す。すると、右側にミウと村長の姿を見つけそちらに歩み寄り声を掛ける。

声を掛けると、ミウがこちらへ振り向き声を掛けたのがネロだと気付く。

「あつ！ 兄さん！ お疲れ様ー。来るの遅かったから見れてないんだけど、いつ負けたの？」

「……3回戦でバルクに負けたよ」

「そうなんだー。兄さんの活躍みたかったなあ。あーあ、兄さんたちと一緒に来れば良かったかも」

そう言うとミウは、落ち込んだ表情をする。そんな表情をするミウには悪いが、自分の試合を見られなくて良かったと思っていた。ミウには、魔法が使える事をまだ知られなくなかったから。いつか必ず知られる時が来るとは思っていても。

ネロは、舞台の方を見る。しかし、舞台では兵士が何やら作業をしているだけで試合が始まりそうな感じではなかった。それに疑問を覚え、ミウに問い掛けた。

「おい、ミウ。試合はどうなった？ バルクは？」

「試合なら、終わったよ。で今は表彰式？ の準備してる。バルクさんは準決勝で負けたよ。だから、そろそろ外で待ってようかなって思った所に、兄さんが来た」

ミウの言葉に頷き、ミウの言うとおり外でバルクを待つ事にしてネロを先頭にミウ達は観客席を後にしていく。

観客席を後にし、選手の控室へ続く扉の近くで待っていると5分ぐらいしてバルクが現れる。バルクは、ネロたちに気付くと手を上げ駆け足でこちらへ近づいてくる。近づいてきて、ネロを見るとその元氣そうな姿に安心したのかホッと息を吐き、直ぐにミウから称賛の言葉が掛けられている。

それから、少ししてバルクが周りを見渡し声を掛ける。

「それじゃ、今日は遅いし宿に行こうか」

バルクの言葉に、ミウは手を大きく振り返事を返し村長はボーとしている。そして、そのまま4人は昨日ネロたち2人が泊まった宿屋

へと向かい、そこで1夜を過ごした。

第15話（後書き）

すみません、誠に勝手ながら明日の更新は御休みとさせていただきます。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第16話

大会があつた日から、1夜明け最後に合流したミウを連れ村の人達のお土産を求めて2時間ほど街を彷徨い続ける。村長は、先に帰りの馬車などを準備するために街の外で待っていてくれている。

お土産を買い終え、ネ口とバルクは多めにミウも少し荷物を持って街の外へ出る。外で待っている村長へ近づき、その近くに止まっている馬車へ持つている荷物を乗せる。乗せ終えたと、ミウと村長に先に行くように言い馬車が走り出すのを待つ。

ネ口たちは、ミウ達が乗った馬車がある程度離れるまで見送ると馬を取りに小屋へと向かう。馬を受け取り小屋の管理人にお礼を言い、その場で馬に跨る。そして、ミウ達が乗った馬車が向かった方向へと走り出した。走り出し、10分程して馬車へ追いつく。ネ口達は馬車に馬のスピードを合わせ一緒に村の帰途へつく。

それから、夜9時ぐらいに4人は村へ着き村人達へお土産を配る為、ネ口とバルク2人で配っていく。ミウは、家に帰り夕食の準備をするために配っていく輪に入っておらず、村長に至っては、

「後よろしくのお」

と言つて、さつさと家へと戻つていった。

村人達に、配っている時にやはり大会の結果が気になっていたのかお土産のお礼もそこに殆どの人が、聞いてくる。

それに、内心恥ずかしく感じながら正直に結果を伝える。その結果を聞くと、村人達は

「頑張ったな」

と自分の事の様に嬉しそうに褒めてくれたり、

「次頑張れ」

と悔しげに叱咤してくれたりと様々な言葉を掛けてくる。そんな風に声を掛けてくる村人達を見て、やっぱりこの村は自分で守りたい。どんなに、大変だとしてもその想いは強くなる。それに、ミウもいる。今はたった1人の家族であるミウがいるんだから。

そんな事を思いながらお土産を配り終え、橋で待っているバルクと合流する。

「なあ、バルク。おまえは以前、『軍に入る』って言った時、俺は何も答えられなかった。でも、今はこの村を自分の手で守りたい。この他人の事を、自分の事の様に笑ったり、悲しんだり、怒ったり。そんな事が出来るこの村を守りたい」

バルクは、話を聞き終えると目を瞑って沈黙する。そんな、バルクが喋り出すまで待つ。ネ口は、バルクに知ってほしかった。今の自分の気持ちを。それを聞いたバルクに、どう思われようとも。短いとも長いとも感じた数秒、漸くバルクが目を開きネ口を見る。

「それが、自ら決めた事なら俺は何も言えないさ……」

そうバルクに言われ、知らず知らずの内に緊張していたのかホツと気が緩むのを感じた。どうやら、バルクに色々と言われると無意識に思っていたらしい。そんな自分に、心の中で苦笑し呆れてしまう。

「おまえが、村を守りたい。と言うなら早いが俺からの頼みを聞いてくれ」

「？」

「母さんと、父さんを守ってくれ……！」

正直、バルクから頼み事を言われるなんて思ってもいなかったから予想が出来なかった。だけど、その頼みごとを聞いてみると、わざわざ言われる程の事でもないと思ってしまうその返事に呆れを含んでしまう。

「なんだよ……そんな事頼まれなくても勝手にやるっての」

そう返事をする、バルクが珍しくブツブツと何かを言っている。それに、笑ってしまうと更に何かを言ってきて、自宅がある方向へ向き手を上げ、

「じゃあな、また明日」

と言って立ち去っていく。その姿に、流石に笑い過ぎたかなと思い明日謝ろうと決め、家に向かって歩き出す。

家の前へ着き、扉を開けようと扉に手をかざす。すると、開ける前に急にこちらに向かって扉が開くの驚き、尻もちをついてしまう。ミウに言葉を掛けようと、顔を上げる。しかし、ネロに映ったのは黒尽くめの姿をした謎の集団達で、その1人の腕には眠っているのかグッタリとしたミウが抱えられていた。

「なっ！？ おまえら、ミウに何をするんだ！！」

急いでそいつらからミウを引き離そうと手を伸ばす。だが、ミウに手が届く前にまだ家にいた人間に伸ばした手を蹴られ、顔も蹴られて地面に頭を打つ。そのまま、ミウを攫った集団は走り去っていき直ぐに見えなくなる。

ネロは、直ぐに追い掛けようと立ち上がり走り出そうとするが、頭を打ったとき脳震盪を起こしてしまったのか直ぐに立ち止ってしま

う。

「ぐう……こんなときに……早くしないと」

頭を押さえ、クラクラとする状態のまま追い掛けるため走り出し村の入り口につく。南北、あの集団がどちらに向かったのか。方角をハッキリとさせるためそれぞれの方角を調べる。南の方を調べていると、地面にミウにプレゼントしたペンダントが落ちている。月明かりの光を反射していたため、気付く事が出来た。そのペンダントを拾って自分の首に掛ける。

攫った集団が、南へ向かっていると判断して南の方角へと向かう。南は、エリピオという他国へと続く道でもある。そちらに、向かっているという事は攫ったのはエリピオの誰か？ 本当にエリピオなのか？ いや、今は誰が攫ったのかを考えるのは後で良い。まずは、追いつきミウを助けるのが先だ！

30分程進んでいると、謎の集団と思われる集団が見えた。しかし、何とか奇跡的に集団を視認出来る距離まで追い付く事が出来た。が、追い付くのは簡単ではない。そう考え、脳震盪を起こした状態のまま集団の前に、何とかデカイ水の壁を発生させ無理やり足を止めさせる。

デカイ水の壁が発生したのに驚いたのか、集団がこちらに向くのが見えた。そして、漸く集団の前に立つ事が出来た。

「貴様ら！ はあはあ……ぐっ……ミウを返せ！！」

集団の前に立ち、何とか言葉を紡ぐ。すると、集団から笑い声が聞こえる。恐らく、状況を見て言えよ！

とか思われたんだろう。だが、同じ言葉を

「返せ！」

と繰り返す。すると、後ろからミウを抱えた人物がこちらに姿を現す。

「ネロ・エピシミア。ここまで、御苦労」

「!？」

その人物から、自分の名前が出てきて驚く。しかし、その人物はこちらの反応を気にすることもなく言葉を続ける。

「彼女を返すのは、構わないが条件がある。……我が主に仕えよ」
「悪いが、断る！」

そんな事の為に妹を、ミウを攫ったのか。そんな自分勝手な思いで、こんな事を出来る人間に仕える気はない。

……ちよつと待てよ？ 俺の名前を知っている上に、仕えよ？ まさか、女王陛下なのか……？

相手は、ネロの返事に溜め息を吐くともう1度同じ事を問うてくる。しかし、こちらもこの様な事をしてくる人間に仕える気なんて全くない。

「……そうか、残念だ。力ある者は、選ぶべき道も間違えては駄目だというのに」

そう言うのと、その人物は抱えていたミウをこちらへ放り投げてくる。そのいきなりの行動に、焦り直ぐに動く事が出来なかった。しかし、相手の行動はそれだけでは終わらなかった。ミウを放り投げると、左腰に挿している直剣を抜き、ミウの心臓へと向かって投げる。その剣は、外れることなくミウの心臓へと吸い込まれていく。

そして、ミウが地面に落ちる音で今の状態を理解し、呆然とミウが

倒れている所へと近づいて行く。

ネロは、自分の体や服が血で汚れる事も気付かずに、今も血の池が広がり続けるミウの傍へと膝をつき腕に抱え込む。

「ミウ……ミウ？　なあ、目を開けてくれ……！　なあ！？」

あの人物が、投げた剣は心臓を貫いている。もう、助かるはずがない。そう頭では既に理解している。でも、納得できる訳がない。少し前までは、笑顔で喋っていたんだ。それなのに、こんな簡単に……？　いや、違う。これは、夢なんだ……夢なら早く覚めてくれ……！

「ネロ・エピシミア。現実を見る。君が間違えた。だから大切な妹は死んだんだ。さあ、次は自らの命を散らすかね？」

「うう……うう」

冷たくなりつつあるミウを抱え込む。ネロは、ミウだけを映す。ミウ以外の人間は邪魔だ。何かに呑み込まれて、この場からいなくなれば良い。今は、2人きりでいたいから。

ネロは、無意識に魔法を発動させる。その魔法の形は、首と胴体と思われる場所の太さが均一。顔は蛇に見える龍の姿の水であった。

その龍は、1度ネロとミウを包み込みかのように周りを回る。

その魔法の形を見た集団は、恐怖を感じ1歩後ずさる。そして、それを見ていた龍は意思があるかの様に、口を開き集団へ向かっていく。

こちらに向かってくる龍から逃げるべく集団は全員後ろへ向き逃げ出した。しかし、人間如きのスピードで、逃げ出せる訳もなく10秒程で全員が龍に呑み込まれ、体を氷漬けにされる。

龍は、呑み込んだまま上空へと飛んでいき顔が雲へ突っ込むとその姿は消え、氷漬けとなった人間もそのまま何処かへと消える。

「ミウ……村へ帰ろう。村の人達が待つてるから」

ネロは、ミウを抱え上げ村の方角へフラフラとしながら歩き出す。しかし、5分程歩いていると、急に頭が割れそうなほどの頭痛が起きミウを地面へと落としてしまう。

「ぐう！？　ぐあああああああああああああああ！
！！！！！！」

ネロは、その凄まじい痛みに耐えきれず川がある方向へと時々コケながら進む。そして、そのまま気付く事もなくネロは川へと落ちた。

第16話（後書き）

次で第1章は終わります

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3320x/>

Filia 友との約束 改訂版

2011年11月4日09時24分発行